

語り手 片桐利喜さん
 (明治30年生まれ)
 昭和61年8月3日収録

あらすじ

昔、お寺があつて、スイトンという名の和尚さんと小僧さんがおつた。毎朝、何かが来て「スイトン」「こう声をかけるので、「はい」と小僧が戸を開けると何にもないし、「不思議だ」と思つておつた。

月の明るい夜。「今日は何だか見届けちゃあけん、長屋に隠れちゃうます」と小僧は物陰に隠れていた。
 そうすると、大きな狐がやって来て、尻尾で戸をすいーとなぜ、頭を「トーン」と当てれば、

似せ本尊②

(西伯郡大山町高橋)



イラスト・福本隆男

やさしい語りで収まる

とぼすやに蟬燭立って、えて、飛び込んだのだ。明かんなあやにしなはい。そおが来つと戸を開けちゃうあら狐が中へ入あけん」と待つていたつて。

その狐が「スイトン、ど、狐はいない。」たし「いんやいんやしなはい」て言や、いんやいんやしなはいよつたてなあ」と言つた。それかとお狐はこらえてもつたら、「ホズンさん、合点と。それからはそのような化けものが出ないように。」

「スイトン」と言つた。「おっさん、狐だと思ひなはい。今夜は退治ちゃうあけん。どつこも灯をを開けたら、狐がうろた

その狐が「スイトン、ど、狐はいない。」たし「いんやいんやしなはい」て言や、いんやいんやしなはいよつたてなあ」と言つた。それかとお狐はこらえてもつたら、「ホズンさん、合点と。それからはそのような化けものが出ないように。」

とぼすやに蟬燭立って、えて、飛び込んだのだ。明かんなあやにしなはい。そおが来つと戸を開けちゃうあら狐が中へ入あけん」と待つていたつて。

その狐が「スイトン、ど、狐はいない。」たし「いんやいんやしなはい」て言や、いんやいんやしなはいよつたてなあ」と言つた。それかとお狐はこらえてもつたら、「ホズンさん、合点と。それからはそのような化けものが出ないように。」

解説

話ほどなたもご存じで、狐が化けているのだからねえ。

話ほどなたもご存じで、狐が化けているのだからねえ。

話ほどなたもご存じで、狐が化けているのだからねえ。

話ほどなたもご存じで、狐が化けているのだからねえ。

話ほどなたもご存じで、狐が化けているのだからねえ。

話ほどなたもご存じで、狐が化けているのだからねえ。